山形大学歴史・地理・人類学論集、第二十三号、42－57頁、二〇二二年

伊佐早謙が収集した「林泉文庫」について ― 市立米沢図書館蔵書を中心に ―

About "Linsen bunko" collected by ISAHAYA Ken —Focusing on the collection of Yonezawa City Library

石黒志保
ISHIGURO,Shiho

【キーワード】伊佐早謙、林泉文庫、米沢図書館
Key words : ISAHAYA Ken, Linsen bunko, Yonezawa Library

はじめに

近代山形の郷土史を考える上で、伊佐早謙（一八五八～一九三〇）、及びその文庫である「林泉文庫」の存在なくして語ることはできないであろう。伊佐早が、明治後期から昭和初期にかけて行った資料収集や『山形県史』（大正九年刊行）、『奥羽編年史料』（明治三十八年完成）等における置賜のみならず、山形・奥羽の歴史資料を編纂した功績は大きく、新宮学氏は「米沢藩以来の貴重な図書が散逸することなく引き継がれたのは稀有のこと」であったと述べている①。

伊佐早は安政四年（一八五八）十二月二十八日、上花沢信濃町（現 米沢市東一丁目）、米沢藩士の御小納戸組の家に生まれ、興譲館提学の片山弦斎（一貫、仁一郎）の下で漢学を学んだ②。明治七年（一八七四）、十六歳の時より置賜郡高嶺小学校に勤め、以降、松岬学校、西置賜小学校、山形県師範学校（山形大学地域教育文化学部の前身のひとつ）で教鞭をとり、明治十七年（一八八四）からは私立米沢中学校に勤務する。同校では断続的に明治三十年まで教えていたが、その間の明治十八年には一時上京し、中村正直（敬宇、一八三二～一八九一）が経営する同人社の教授嘱託となり、約八ヶ月そこで教鞭をとり、翌年、米沢に戻る。また明治二十三年からは、上杉家より記録編纂を任ぜられ、「上杉家御年譜」、「上杉家記」、「上杉謙信公年表」等の編纂を行った③。

さて、本稿の主題となる伊佐早の蔵書「林泉文庫」の来歴を論ずる前に、その文庫を伊佐早没後に保管してきた米沢図書館の歴史を

今一度確認する必要がある。市立米沢図書館の前身となる財団法人米沢図書館は明治四十二年（一九〇九）に開館する。その二年前の明治四十年、伊佐早もその発起人に名を連ねる「図書館財団設立趣意書」が提出され、米沢図書館の設立が望まれた。その「趣意書」には、

私カニ案ズルニ社会ノ文化ヲ進ムル事業ハ一ニシテ足ラズト雖モ学校ニ次ギテ有効ナルモノハ図書館ヲ以テ最トス、④

と、図書館を設立することは、学校に次いで社会の文化を進める有効なる事業の一つであると述べられている。遡ること慶応二年（一八六六）に刊行された福沢諭吉の『西洋事情　初編』で西洋の「文庫（ビブリオテーキ）」が初めて日本で紹介され⑤、明治五年（一八七二）には、湯島聖堂内に書籍館が設けられた。これが日本における近代図書館の始まりであったとされる。山形県内では、私立米沢中学校内で書籍を「人民へ縦覧」させていたが⑥、県内において本格的な図書館の開設は、明治二十五年（一八九二）、山形中学校内に私立山形図書館が開館したことである。時代は下るが、明治四十二年の財団法人米沢図書館の開館もこの全国的な図書館設置の気運が高まっていた時期であり、その背景には明治三十三年に図書館令（旧）が発布され、公共図書館の設置に法的な根拠が与えられ、教育制度上の位置が明示されたということとも関係がある⑦。

米沢においての図書館の状況は、先に述べたように明治八年頃から私立米沢中学校内で資料閲覧が行われていた。さらに県内でも先駆的な図書館（文庫）創設の計画が、明治二十五年頃に米沢の自由民権運動家の清水彦介（一八二一～一八九五）によって考えられていた⑧。その清水の「米沢文庫設立案」には米沢大町にある「米沢文庫」の保存に苦しんでいるならば、「米沢中学校ヲ借リテ書籍館トナシ米沢文庫ヲ置」き、規則を設けて「後世永保シテ失ハザルノ道」を立てるべきだと述べられている⑨。清水の図書館（文庫）構想は実現しなかったが、米沢における図書館建設の素地はこのように整っており、それが伊佐早らによる明治四十年の「図書館財団設立趣意書」に繋がるのであろう。「趣意書」には次のようにも述べられている。

興譲館財団ニ於テハ従来保管スル所ノ旧藩伝来ノ蔵書全部及文庫一棟ヲ寄贈セラルベク猶創立費ニ対スル相当ノ出金及維持費ニ対スル年々一定ノ金額ヲ支出セラルベキ内議アリ、（中略）彼ノ伝来ノ蔵書タル殆ンド和漢有用ノ典籍ヲ網羅シ巻帙数千ノ多キヲ有スルノミナラズ現今金銭ヲ以テ購フベカラザルノ珍書亦少ナカラズ、将来之ニ多少ノ新書ヲ加ヘ逐次拡張ヲ図ルニ於テハ地方有数ノ図書館トナシ得ルノ日決シテ遠キニアラザルヲ信ズ⑩

興譲館財団から旧藩時代の蔵書全てと文庫建物一棟が寄贈されること、また創立費のみならず毎年一定の出資金が供出されることが内諾されている。そして、その蔵書は和漢の有用なる書籍であり、当時においても金銭を以て購入できるものでもない。将来、多少の新書を加えながらも「地方有数ノ図書館」となることを願って、図書館の設置が望まれていたことがわかる。その趣意を掲げた財団法

人米沢図書館は、明治四十二年（一九〇九）十月七日に開館式が挙行され、同月十七日より一般公開をし、「午前九時ヨリ館内縦覧ヲ許セシニ来館者男子九十五人、婦人三十七人」が来館したと『図書館日誌』には記載がある⑪。

さて、伊佐早は財団法人米沢図書館の開館以来、図書館人としても活躍し、近代山形の図書館の黎明期に、その資料の保全に尽力した人物だといえる。また一方で、収集した資料を用いて歴史書の編纂をした、近代山形における最初の郷土史家としても知られる人物である⑫。その伊佐早の資料収集の軌跡を辿り、中でも特に終生かけて集めた「林泉文庫」の現在の所在を確認し、その収集の意図を探ることが本稿の目的である。

尚、本稿は国立歴史民俗博物館「総合資料学の創成」事業（奨励研究「山形において近代に収集された歴史資料の研究と活用―長井政太郎収集資料と林泉文庫」）における研究成果である⑬。伊佐早家をはじめとする関係各者に多大なご協力を頂いたことを付しておきたい。

一、「林泉文庫」の現在

伊佐早の蔵書である「林泉文庫」は、自身の住んでいた林泉寺町にその名を由来する。そして伊佐早は大正五年（一九一六）十一月に林泉寺町の自宅を改築し落成している。また現存する「林泉文庫扁額」には「大正甲子（十三）五月初八□□　六十八翁謙」⑭とあり、この額は伊佐早が六十八歳の時に掲げたものだとわかる。いつから自身の文庫を「林泉文庫」と称していたか不明であるが、一つの指標になるかと思われる。この三か月前の二月十日から三月二十二日にかけて、伊佐早は米沢藩最後の藩主である上杉茂憲の事績調査のために沖縄を訪れ、「北燕游草」⑮や「御詩和韻集」⑯等の貴重な琉球漢詩文の資料を持ち帰っていることとも関係があるのかもしれない。

所　蔵　館	コレクション名	点　　数
市立米沢図書館	「林泉文庫」として整理	706部（1,634冊）
	「米沢善本」として整理	20部　（109冊）
	「興譲館本」として整理	6部　（48冊）
	その他	2部　（14冊）
山形大学小白川図書館		1,267部（5,516冊）
山形県公立大学法人付属図書館（前　米沢女子短期大学付属図書館）		94部　（521冊）
瑞龍院龍門図書館（白鷹町）		497部（1,987冊）
米沢市上杉博物館	「上杉文書」所収	点数不明

さて本稿で「林泉文庫」と称する資料は伊佐早が自宅の書庫「林泉文庫」と掲額した書籍全体とする。現在、確認している伊佐早の蔵書印は「羽前　米澤市　林泉寺町　伊佐早謙」、「伊佐早蔵本」、「伊佐早謙」、「林泉文庫」、「伊佐早兼古書之寶」、「伊佐早謙字君益之印」、「兼印」、「君氏益」の八点、また米沢図書館で貼られたと思われる「林」の朱印ある付箋も確認している⑰。しかしながら注意したいのはこの蔵書の多くは伊佐早の蔵書印とともに、たとえば「米沢蔵書」印等の他の蔵書印も一緒に捺されていることである。「米沢蔵書」とは、米沢藩の藩庫に収蔵されていたものであり、恐らくは伊佐早が資料収集の過程の中で、もしくは財団法人米沢図書館館長時代に所蔵が混同されたものかと思われる。伊佐早は図書館長と同時に上杉家記録所総裁を委嘱されており、上杉家の家史及び郷土史の編纂を自宅でして

いた関係で、そのような混同も起こり得たのではなかろうか。

では「林泉文庫」の現在の収蔵状況はというと、表のとおり山形県内の各館で分散して収蔵されている[18]。「林泉文庫」がこのような分散をしている現状を振り返ると、昭和三年（一九二八）、伊佐早は上杉鷹山の彫像製作の資金援助のために酒田の本間家を訪れた際ににわかに発病、同五年四月に図書館長を辞すと、同年六月五日に没する。遺言により、伊佐早の蔵書である「林泉文庫」は同年に上杉家に寄贈され、その大半である一万一二四〇冊（三一四一部）が、昭和十三年（一九三八）、米沢図書館に寄託された。因みにこの年の四月に財団法人米沢図書館は市営化され、「市立米沢図書館」として運営を新たにした年でもあった。

次の「米沢新聞」昭和十三年一月二十日の記事は、伊佐早生前より、同文庫の存在が世に知られていたことが窺えるものである。

「伊佐早文庫　上杉家に寄附　図書館に保管する」

史学者として名を成した米沢市林泉寺町故伊佐早謙翁の残した所謂「伊佐早文庫」は郷土史研究調査上貴重な古文書が多いので同翁の没後図書館に委託してほしいと関係者達は遺族に要望して来たが、伊佐早家ではこれを上杉家に寄附したき旨の申出あり、上杉家では実現の上は図書館に保管を依頼することになる模様で郷土史研究家達が待望して居た「伊佐早文庫」の公開される日も近いものと期待されてゐる。[19]

そしてこの年に米沢図書館に「林泉文庫」が上杉家から寄託される。同館に残る「郷土資料の由緒」には、昭和五年の上杉家への寄贈は、伊佐早の息子である信によってなされたこと、また上杉茂憲の助言もあったことが記されている[20]。

さて、市立米沢図書館に寄託された「林泉文庫」は、同館が昭和二十八年（一九五三）に郷土米沢に関する書籍群を購入、昭和三十年（一九五五）には山形大学小白川図書館が六回に分けて購入している。その翌年には米沢図書館が「林泉文庫追加分」として約一二〇点を追加購入した。そして昭和三十九年（一九六四）に米沢図書館所蔵の「林泉文庫」六八七部を収録した『林泉文庫目録』（のち、昭和五十八年に改訂版発行）を刊行し、世に「林泉文庫」の存在が知られるようになった。その後、米沢女子短期大学附属図書館及び瑞龍院龍門図書館（白鷹町）が残りの「林泉文庫」を購入し、現在も各館で保存されている。

この表にある米沢市上杉博物館所蔵の「上杉文書」中に「林泉文庫」が収蔵されている経緯については後述するが、「林泉文庫」の上杉本邸所蔵分が以前から上杉家で所蔵していた藩政資料とともに米沢図書館に「上杉文書」として寄贈されたからである。また、この表にある市立米沢図書館所蔵の「その他」の資料は、「編年子爵上杉家記」（十三冊、同館　上杉支侯家文書三所収）、「米沢雑事記」（一冊、同館　中沢氏収集資料十八）であるが、前者は伊佐早謙の著作物の写本で、後者には「林泉文庫」印、「羽前　米沢市林泉寺町　伊佐早謙」印が捺されている。後者の「米沢雑事記」の履歴について不明であるが、このように他にも未発見の「林泉文庫」はまだ存在すると思われる。

さて、伊佐早の資料収集の遍歴について述べておきたい。「林泉文庫」の形成過程における重要な契機となったことは、伊佐早が明治二十三年（一八九〇）に上杉家の資料編纂を委嘱されたこと、大正元年（一九一二）に財団法人米沢図書館館長に就任したこと、大正十三年に第二代沖縄県令上杉茂憲の事績調査のために沖縄へ赴いたこと、また『奥羽編年史料』や『山形県史』等の史書の編纂事業が委嘱されたこと、このことが大きな契機だったかと思われる。その「林泉文庫」の構成を大まかに分類すると以下のようになるのではなかろうか。

（1）上杉家の資料編纂のために収集したもの（上杉茂憲関係資料を含む）
（2）財団法人米沢図書館館長時代に収集したもの
（3）『奥羽編年史料』や『山形県史』、『編年西村山郡史』、『米沢市史』等において収集したもの
（4）自身の著作物、直筆原稿類
（5）個人的な興味で収集したもの

（1）、（2）、（3）は厳密に線引きをすることはできない。また（2）の資料の多くは現在、米沢図書館の「興譲館本」に収められているかと思われる。伊佐早は図書館長時代、図書館前に「今般本館ニ於テ旧米沢藩先輩諸氏ノ著書類ヲ購入ス、売却希望ノ方ハ御来談ヲ乞」との看板を出し、資料収集に注力していたことが確認でき、それが米沢図書館の蔵書を構成していった[21]。

そして（1）の中でも上杉茂憲関係資料や（5）の自身の興味により収集した琉球漢詩文の資料等は大正十三年の沖縄旅行時に収集したものである。また先の表には挙げていないが、（4）の直筆原稿類には伊佐早が大正二年（一九一三）に『米沢市史』編纂を依頼された時に執筆したものと思われる原稿も残っている[22]。（5）については、伊佐早は『鶴城詩集』（明治十二年刊行）や『恩栄紀詩』（大正十四年刊行）、『樅軒稿』（大正十五年刊行）等の漢詩集を編纂、また米沢市内の各地に建立されている石碑に刻字しているように漢文、漢詩文を得意としていた。従って沖縄旅行時に収集した琉球漢詩文関係の資料が伊佐早の漢詩への興味によって集められたものと考えられる。さらに「香草斎詩註」（市立米沢図書館所蔵　林泉文庫三三二）には「大正甲子三月獲之于琉球　伊佐早謙」、「書室常置樅軒老人」との張り紙が貼られており、伊佐早が常にその書室に置いていた資料であったことがわかる。

さて、資料収集とともに伊佐早の功績として、資料の保存・保管にも力を入れていたことが挙げられる。伊佐早が米沢図書館館長時代の大正六年（一九一七）と同八年に米沢は市内をほぼ焼き尽くす大火に見舞われる。特に大正六年の大火の際は、財団法人米沢図書館があった法泉寺境内の文殊堂（現　米沢市西大通一丁目）も焼失、隣接していた図書館はかろうじて火難を免れるが、資料焼亡の危機を抱いた伊佐早は「鉄筋コンクリート築造ノ文庫一棟ヲ建設シ珍籍ヲ万古ニ伝存」[23]するために、珍書文庫の建設を企図する。

当米沢図書館所蔵中特種珍本之儀ハ、海内絶無僅有ノ珍籍トシ

テ全国図書館ノ欽羨惜カザル所ニ有之候、去ル大正六年同八年当市大火之際、罹災ノ不幸ヲ免レ候ハ実ニ神鬼ノ呵護ト存候、今後第一ノ変災モ候ハバ在来ノ文庫ハ耐火上甚ダ以テ薄弱為メニ絶無ノ珍籍ヲ烏有ニ帰セシムルノ懼レナシト為ス、然ルニ於テハ独リ当館ノ不幸ノミナラズ、実ニ国家図籍ノ不幸ト存候、㉔

米沢図書館の特種珍本は「海内絶無僅有」のものであり、全国の図書館の「欽羨」を集めているものであるが、この米沢大火を免れたのは実に神鬼の御加護によるものだ、と伊佐早はいう。しかし、今後「変災」がもし起きれば、現在の文庫（書庫）では耐火できず、「絶無ノ珍籍」は灰燼に帰してしまうのではないか。これは、当館の不幸のみならず国家の図籍の不幸である、と伊佐早は述べている。

この伊佐早が構想した鉄筋コンクリートの文庫は、予算の都合上、石造となったが、米沢市からの補助金のほかに、全国地方有志者からの寄付金も集まり、大正十二年に完成した。以降、興譲館伝来の珍書（貴重書）はそこで保管されてきた。

このような伊佐早の図書館長時代における功績について、没後すぐに山形県立図書館が編集した『故伊佐早謙先生閲歴』では、伊佐早は財団法人米沢図書館の「創立以来之に関係して尽力するところ多く、特に晩年この方面に対して最善の力を注」㉕いでおり、古書展覧会の開催（大正三年、同五年）㉖を行うなど、明治期から大正期にかけての米沢図書館黎明期において資料の収集・保存・公開といった図書館の意義を伊佐早が表したことは、その後も同館運営の指針となっていく。

その伊佐早の思考の背景には、明治四十四年（一九一一）に伊佐早が財団法人米沢図書館敷地に刻んだ石碑に、「是に於いて興譲館財団を新設し、以て図書財産を保管し、亦将に人文発達之途に資するを以て有らしめんとすべき也」㉗と、図書財産を保管することは人文学の発達に資することであると考えていることからも窺える。つづけて、この石碑には以下のように刻まれている。

文庫は堅牢、楼室は宏く潔し、奢らず陋せず、閲覧の便全て備わりて、宝書珍籍の富、則ち敢えて足利文庫の下を出でず。豈盛んならざらる哉。蓋し人文の発達は、固より図籍に依らずんば、凡そ求めうる能わざらん乎。

此の館は、夙夜研究修徳し、智を磨き、以て国運の発達に資す。是本館の設立の所以也。㉘

この石碑の上部には、上杉茂憲によって「智府」と刻まれている。図書館の建物は堅牢、部屋はひろく清潔であり、余計な飾りもないが、図書を閲覧するためのものはすべて備わっている。さらには「宝書珍書」は足利文庫にも劣らないものである、と伊佐早は石碑に刻んでいる。それは人文学の発達には図書には必要であり、それを収蔵する図書館は「夙夜研究修徳」をするために、智を磨き、引いては「国運の発達に資」すること、これが米沢図書館の設立の理由であるという。では、伊佐早が米沢図書館を設立し、藩校興譲館伝来の書籍を残そうとした、その書籍とはどういったものであったか、次章で見ていきたい。

二、藩校興譲館及びその伝来書について

市立米沢図書館のコレクションの一つである「興譲館本」は、藩校興譲館に伝来した書籍群であるかのように思われがちであるが、財団法人米沢図書館の開館後に寄贈された各家の文書も多く含まれている。たとえば、明治四十四年に寄託された清水彦介の蔵書（昭和十三年に寄贈となる）や、興譲館提学の窪田茂遂の窪田家に伝来した「窪田蔵書」、また大町の豪商であった渡部伊右衛門の蔵書等も「興譲館本」中に含まれている。青木昭博氏によれば、明治の図書館開館以来収集してきた古典籍・古文書群の中で、「米沢善本」以外のものを「興譲館本」として整理してきたという[29]。従ってこの群に収蔵している蔵書はすべて「藩校興譲館本から伝来した書籍群であるとの誤解」が生じてきたが[30]、開館以来、図書館が整理する過程の中で寄贈・購入してきた文書も多く含まれている。

このため、表に見られたように「興譲館本」の中に「林泉文庫」が含まれているのは、こうした米沢図書館内での再整理された過程の中で生じたものであろう。では、そもそも藩校興譲館に伝来した文書群はどのようなものであったのか。伊佐早とも関係が深いため、まずは藩校興譲館の歴史から見ていきたい。

元禄十年（一六九七）、米沢藩医で儒者であった矢尾板三印宅で祀っていた聖堂を米沢藩第四代藩主の上杉綱憲が改造し、「感麟殿」と名付けた。さらにはその脇に講堂を建立し、矢尾板家はそこで『論語』や『大学』の講義を始めた。これが米沢における藩校の始まりと言われる[31]。その後は藩政状況の悪化で衰退していくが、安永五年（一七七六）に米沢藩第九代藩主の上杉治憲（鷹山）が学館設立を命じ、尾張の儒学者細井平洲を招き、藩校興譲館を創始する[32]。その藩校の書庫にあったものが「興譲館蔵書」印が捺されているものである。

戊辰戦争下の慶応四年（一八六八）には、藩校興譲館は一時生徒を解放して兵士の屯所とし、次々と運ばれてくる負傷兵の病院と化していた。また洋学の必要性を感じていた高橋玄勝をはじめとする藩医らは幕府医学所頭取の松本順とともに幕府軍に従軍していた渡邉洪基らを引き留め、米沢に洋学を広めようとするが、戦中であり、軌道にはのらず、米沢に洋学舎が設けられるのは明治四年（一八七一）一月になってからであった。同年十月にイギリス人のチャールズ・ヘンリー・ダラス（Charles Henry Dallas, 一八四一～一八九四）を語学教師として迎え、洋学を教える土台がようやく整う。その翌年には文部省布達により藩校「興譲館」は名目上廃止され、明治七年に私立米沢中学校と改称され、米沢義社の管理で運営がなされた[33]。米沢義社とは、上杉家より旧藩士に与えられた資金を元に作られた組織で、その利子を米沢中学校の授業料と経費に充当した。伊佐早が私立米沢中学校の教諭であったのは明治十七年から明治三十年までであったが[34]、その最中の明治二十六年には同校は米沢尋常中学校と改称、さらに同二十八年には米沢中学興譲館に改称とするなど、私立米沢中学校の運営に関して錯綜が見られた。

また私立米沢中学校の運営元でもあった米沢義社においても、明治九年（一八七六）に「義社籾払紛擾事件」が起きた。それは、内務卿大久保利通より米沢に製糸工場を設立するようにとの上杉斉憲に打診があり、上杉家から一万五千円の出資金と義社から配当金

一万七千円と義社所有の籾二万俵を売却し一万三千円を調達、その際に義社社長の庄田総五郎が上杉家所有の籾売買や義社所有の籾も合わせて売却したことにより、庄田社長に贈賄疑惑が持ち上がり、当時の旧藩士の生活の窮乏も相まって不満が一気に噴出した[35]。これが「義社籾払紛擾事件」であったが、以降、明治十三年、義社は株式化を行い、明治十六年七月、第七代社長に高梨源五郎が選任され、義社は高梨のもとで金融機関へと発達していく[36]。また同二十六年には株式会社に改組、同三十二年には普通銀行として登記を行った（大正五年には両羽銀行に合併吸収される）[37]。

藩校興譲館の歴史に戻ると、明治三十二年（一八九九）、通常県会において米沢中学校の県立移管の議案が可決され、翌年には県立に移管され、山形県米沢中学校と改称される（翌年、山形県立米沢中学校とさらに改称）。この県立に移管されるときに興譲館財団が組織され、藩校興譲館以来の蔵書の管理はこの財団下に置かれることとなった。従って財団法人米沢図書館の設置も、全国的な図書館の設置の流れによるものと同時に、興譲館財団が管理する興譲館の蔵書をどのように保管するかといった問題も当時、生じていた。

さて財団法人米沢図書館が開館してまもなくの明治四十四年（一九一一）、伊佐早によって釈奠（典）という行事も再興された。『故伊佐早先生閲歴』には「釈奠の儀久しく中絶せるを慨き、米沢図書館設立と共に之を復興し、大いに道徳の振興を計る」[38]とあり、また図書館内で「斯文會」という会を開き、論語、孟子の講義も行っていたという。

この伊佐早が再興した釈奠は、古くは矢尾板家の聖堂で行われていたもので、孔子を始めとする儒学の先哲をお祀りする行事である[39]。矢尾板家で行っていた「自分釈奠」、それは上杉綱勝の創始の際も、上杉鷹山の再興時においても学問、特に漢学の振興を願って興譲館にて行われてきたものであり、明治四十四年に伊佐早が刻んだ「創立米沢図書館碑」にも、

藩学に旧き孔子廟あり、亦財団所管と為し、祭祀を怠らず。今、茲に辛亥、廟を館の東北に徒し、祭の資金五百円を置き、以て祭をここに並記し、以て茲に来たるに諗ぐと云う。[40]

と、藩校興譲館にある孔子廟（聖堂）を図書館の東北に移設し、祭祀を復興することが述べられている。この釈奠は財団法人米沢図書館が市営化される昭和十三年（一九三八）まで続き、図書館の運営とともに行われていった[41]。つまり、伊佐早ら当時の図書館運営をしていた者にとって、藩校興譲館の書籍を米沢図書館が受け継ぐことと、釈奠の行事は必須不可欠なものであったのであろう。

蛇足になるが、伊佐早よりも先に米沢において図書館（文庫）について考察していたのが先に触れた清水彦介である。米沢図書館の開館から遡ること明治二十五年（一八九二）頃に、清水によって書かれた「米沢文庫設立案」には、

天下ノ宝書籍ヨリ大且重キ者アラザル也、社会ノ万事書籍ニ非レバ天下後世ニ伝フベカラザルヲ以テ也、皇太神宮ノ聖徳至善ト雖モ唯口碑ニ任セテハ今ニ至テ其男体ナル哉女体ナル哉ヲ

詳ニスベカラズ、故ニ文明国ニ至テハ皆書籍ヲ尊重セザルナシ、故ニ今西洋諸国其人之遺愛遺徳ヲ後世ニ伝ヘント欲スル者必其文庫ヲ建ツ[42]

とあるように、福沢諭吉の『西洋事情』に影響を受けた文庫（図書館）案が提唱されている。書籍をおいて天下の宝というべきものはなく、社会の万事すべて書籍をもって後世に伝わってきている。たとえば「口碑」に任せていたために皇大神宮、アマテラスが男体なのか、女体なのか、今となっては明らかではない。だから「口碑」に任せずに文明国においては書籍を尊重するので、西洋諸国の人々はその遺愛、遺徳を後世に伝えるために書籍を蔵する文庫を建てるのである、と清水は述べている。そしてすでに「有志者米沢文庫ヲ大町ニ立ツ、其保存ニ苦」しんでいた状態であることを鑑み、

今米沢中学校ヲ借リテ書籍館トナシ米沢文庫ヲ置カント欲ス、堅ク之レカ規則ヲ設ケ後世永保シテ失ハザルノ道ヲ立テズハアルベカラズ、[43]

米沢中学校を借りて書籍館としてその大町にある米沢文庫を移設し、保存をすればいいと清水は考えている。そしてこの書籍館の運営規則まで考えた清水の図書館案は実現しなかったが、先にも見たようにこの清水の蔵書群は明治四十四年に米沢図書館に寄託され、現在その多くは「興譲館本」に収蔵されている[44]。

では、明治四十二年の財団法人米沢図書館の開館時、興譲館財団より寄贈を受けた書籍はどういったものであったのだろうか。青木昭博氏の研究に沿いながら確認すると、以下の目録作成に伊佐早が関わったと考えられる。

（1）「興譲館伝来珍書目録　付解説」（手書き資料）
（2）「興譲館伝来図書目録」
（3）『興譲館財団寄贈図書目録』
（4）明治四十四年刊行『珍書目録』

（1）は、その内題に「珍書目録　米沢興譲館財団」、（2）にも内題に「米沢興譲館財団文庫目録」とあるため、この二つの目録は興譲館財団が作成したものだとわかる。この財団は米沢中学校が県立に移管された際に設置されたものであり、また（2）の付帯資料には「明治四十年三月二日」付で財団に目録を提出するようにとの依頼文書があるため、この（1）と（2）は財団で作成されたもので、明治四十二年開館の財団法人米沢図書館に引き継がれたものであった。青木氏は「藩校興譲館伝来の蔵書は、興譲館財団時代に伊佐早が加わって、本格的な整理が行われ、明治四十二年に米沢図書館に寄贈」されたと述べている。

また（4）の目録の序には「各書目ニ附スル解説ハ本館理事伊佐早謙撰スル所ノ珍書目録（漢文）ノ内ヨリ其ノ概要」を載せたものとあり[45]、（1）の漢文の目録の内容と合致するため、（4）は（1）を元に作成されたものであることがわかる。

さらに青木氏はこの（3）の『興譲館財団寄贈図書目録』がその

内容から推察すると興譲館伝来の書籍群全体を最もよく表しているとし、「第一　珍書之部」九四部（九五五冊）、「第二　上杉鷹山公御手沢本目録」六四部（二九〇冊）、「第三　和漢書目録」五四三部（一〇七七〇冊）、総じて七〇一部（一二〇一五冊）が藩校興譲館からの伝来本であると推定している。

そして（4）の『珍書目録』が、財団法人米沢図書館の開館後の明治四十四年に発行した珍書一〇九点の目録である。その後、『珍書目録』は昭和十一年（一九三六）、昭和十八年（一九四三）と三回刊行され、ここに収録されている文書群が同館の中でも珍書として取り扱われ、先にも述べた伊佐早が大正十二年（一九二三）に建設した珍書蔵（石倉）に収蔵されてきた。昭和十八年に刊行された『珍書目録』に掲載された珍書は二八七部（二二二五冊）と（4）『珍書目録』に比すと二倍以上の増加を見せているのは、昭和十三年に上杉家から「林泉文庫」の寄託があったからである[46]。

これまで見てきたように伊佐早は財団法人米沢図書館の開館前の明治三十二年頃、興譲館財団が藩校興譲館伝来の書籍を管理することになって以降、目録の作成を行い、それが財団法人米沢図書館に受け継がれ、現在も『珍書目録』に掲載された資料が同館所蔵の「米沢善本」や「林泉文庫」に収められている。また、この『珍書目録』をもとに太平洋戦争時、米沢市郊外の塩井村等に珍書を疎開させたことが『図書館日誌』や内部資料でわかっている[47]。伊佐早が興譲館伝来の書籍を目録化し、珍書蔵を設け、その保存を行ってきたことが、このように後世においても脈々と米沢図書館に受け継がれ、それが新宮氏が述べる、米沢藩以来の貴重な資料が散逸を免れた重要な要因であったかと思われる。

三、林泉文庫の全容解明に向けて

さて、最後に伊佐早の「林泉文庫」のその全体像を考えてみる。それには、昭和十三年に上杉家から市立米沢図書館に寄託された際に寄贈された『林泉文庫寄贈書及書目』（以下、『書目』）が有用である。この『書目』は市立米沢図書館の図書原簿によれば三冊、上杉家から昭和十三年十月に寄贈されており、またその作成者は伊佐早の息子である信によるものであることがわかっている[48]。そして現在その『書目』は、市立米沢図書館に二冊、山形大学小白川図書館に一冊所蔵されている。

（A）市立米沢図書館　事務室用
（B）市立米沢図書館　保存用
（C）山形大学小白川図書館所蔵本

（A）は、『米沢藩興譲館書目集成』第四巻に影印本が掲載されている。（B）は、（A）には印や書き込みがあるのに対して、ほぼ書き込みはなく、保存用かと思われる。そして（A）の書き込みや印は、昭和十三年の寄託時、または昭和二十八年の購入時やその後の事務作業において記されたものであるかと思われる。また（C）には、「〇」印や「教分館」の朱印が捺されており、昭和三十年（一九五五）の山形大学附属図書館の教育学部分館で購入し、受入したものであることがわかる[49]。さて、その『書目』の目次には、

書目一　上杉家本邸所蔵目録
書目二　市立米沢図書館寄託書目録
書目三　伊佐早家保留書目録

とある。この「書目一　上杉家本邸所蔵目録」分は上杉家本邸に保管された後に、上杉家にあった藩政資料とともに「上杉文書」として、昭和二十九年（一九五四）に米沢市が譲り受け、市立米沢図書館で保管がなされた。その後の昭和四十四年（一九六九）には「上杉文書　マイクロフィルム」が雄松堂より販売され、その目録として「上杉文書目録」が刊行されたが、その目録には「『上杉文書』の中に『林泉文庫』は若干加えられている」と記されている。しかし、その後の研究で「上杉文書」の三分の一以上が「林泉文庫」に収蔵されていたものであることがわかっている[50]。

「書目二　市立米沢図書館寄託書目録」とあるものが、現在、「上杉文書」以外の「林泉文庫」で、山形県内の各館に分散されているものかと思われる。では、米沢図書館で所蔵する『書目』二冊のうち、事務室で保存してきた（A）本の「書目二　市立米沢図書館寄託書目録」の書き込みを詳しく見てみたい。「書目二」の書き出しには[51]、

「貴」印　珍書部
「米」印　郷土部
「▲▲」印　郷土部ヨリ除去
「■」印　雑部

との手書きの書き込みがある。「貴」印は貴重書（珍書）の意味で、全部で四十三部に捺されている。たとえば、「因学紀聞」（米沢善本三八）や「擬表」（米沢善本二三）、「百人一首抄」（米沢善本一八六）等の現在も米沢図書館の米沢善本コレクション下に収められている二十二部の資料のほかに、一部不明本があったが、その多くは同館に所蔵される「林泉文庫」や「上杉鷹山公御手沢本」に含まれているものであった。

「米沢善本」とは、昭和三十一年（一九五六）、ハーバード燕京研究所の資金援助を受けた同志社大学でハーバード燕京同志社東方文化講座委員会が組織され、その研究の一環で京都大学人文科学研究所の研究者たちが米沢図書館を訪れ、同館の蔵書中の良本の蔵書目録が作成された[52]。漢籍一四六部、和書六十二部の全二〇八部二一三八点の目録であった。その目録解題に沿い、米沢図書館ではそれをコレクション化し、「米沢善本」と名付けた。そのため、元来は「林泉文庫」に収蔵されていた資料であっても、この際に「米沢善本」に分類された。

「米」印は米沢図書館の郷土資料として同館が購入した「林泉文庫」のうちの郷土に関する資料に捺されており、全部で四二五部あった。現在、同館の「林泉文庫」は七〇六部一六三四冊所蔵しているが[53]、ほぼその中に収められているものにその印が付けられている。「▲▲」印は五部あり、同館には現在所蔵が確認されていないものである。さらに、「■」印は八部あったが、そのすべて市立米沢図書館には所蔵がないものであった。

またこの四つの印の他に資料名の上部に、

「●」印
「アリ」との書き込み
「㋹」印
「㋹■」印

との書き込みがあった。この印が付けられた資料を見てみると、このうち「●」印は一八九部あり、現在、同館では「林泉文庫」コレクション下、または「興譲館本」コレクション下に収められているものが多くあった（一部不明なものあり）。

「アリ」と書き込みのあった資料は二十三部あり、そのうちの半数ほどは同館の「林泉文庫」コレクションに収蔵されているものと同定できる。「㋹」印は一七三部あり、このうちの数点が同館の「林泉文庫」コレクション、もしくは「興譲館本」に所蔵されている以外は現在同館には所蔵されていないものである。「㋹■」印は八十九部あり、その殆どの資料の所蔵はなかった。この同館に所蔵がない資料、または無記号の資料や、（A）と（C）本の比較・照合を本稿で行うまでには至らず、今後、さらなる比較研究が必要である。さらに伊佐早の「林泉文庫」の全容を把握するのを困難にしているのは、「林泉文庫」に伊佐早の蔵書印が捺されてはいないものも存在することである。

また前項の表でみたように米沢図書館の「米沢善本」中に「林泉文庫」は二十部一〇九点あるが、「米沢蔵書」「稽古堂叢書」等も捺されているので注意しなければならない。「米沢蔵書」とは米沢藩の藩庫に収められていたもの、「稽古堂蔵書」とは上杉鷹山の書棚にあったと伝えているものである。

同館の「興譲館本」中には、「林泉文庫」は六部四十八点確認しているが、「窪田蔵書」印と併印されているものが三点、「興譲館蔵書」印と併印されているものが一点あった。「窪田蔵書」とは、藩校興譲館の提学でもあった窪田茂遂の家の蔵書であり、明治四十四年に米沢図書館は窪田茂遂の子孫である窪田茂正より寄贈を受けたものである。そのほか、同館中の伊佐早蔵書と考えられるものには、中沢氏収集文書中に一部「米沢雑事記」が「林泉文庫」印と「羽前　米沢市林泉寺町　伊佐早謙」印を捺されていたものが確認している。このようにそれらの資料を、一概に「林泉文庫」とは称せないかと思われるが、伊佐早の蔵書印が捺されている資料、そこには伊佐早の収集の意思が見出されると考えられるのではなかろうか。

そしてもう一点、今後検討しなければならないのは、伊佐早の蔵書印八つをどのように使い分けていたのか、ということである。たとえば「伊佐早兼古書之寶」印が捺されている資料は、現在、市立米沢図書館蔵書中で三十七部ほどしかない。「米沢善本」に十六部、「林泉文庫」中に二十一部、そのほかに一部確認しているのみで、蔵書中で特に貴重だと伊佐早が考えていた資料に捺されていたかと思われる。伊佐早の知の集積たる「林泉文庫」の全容把握にはまだまだ課題が残る。

おわりにかえて

本稿では「林泉文庫」と伊佐早の資料収集のあり方を見てきたが、伊佐早の図書館の運営は、米沢藩以来の貴重な古書を保存・保管す

ることにその意義を見出してきた。「林泉文庫」の収集もその導線上にあるものだろう。その伊佐早の資料収集の理由を考えるに、伊佐早が「全心血を注がれたる一大著述」[54]であった『奥羽編年史料』の凡例には次のよう記されている。

本書筆ヲ鎌倉府ノ首ニ起ス、当ニ江戸府ノ尾ヲ以テ獲麟トナスベシ、然レドモ慶長以後ニ於ル奥羽各家ノ文書記録実ニ浩繁無量ナリトナス、今之ヲ閲覧シ之ヲ考究センコトヲ欲セバ更ニ数十年ノ力ヲ費ヤサザルベカラズ、[55]

この『奥羽編年史料』は鎌倉期から江戸期の終わりまでを収集した資料群である。慶長以来の奥羽の各家の文書記録は膨大にあり、それをひとつずつ見て考察しようとすると、数十年の年月がかかる研究になるだろう、と伊佐早は述べる。『奥羽編年史料』等の資料編纂を行なった理由はこの点に尽きるのだと思われる。さらには、

本書体製ヲ編年トナス、故ニ各家ニ即チ其首尾ヲ綜貫スルコト能ハズ、然レドモ細心通読ヲ致サバ各家ノ首尾ニ於テモ亦自然ニ要領ヲ宥得セン、[56]

と、この書を編年体で記すのは、各家々の歴史の首尾を総覧させるためであるという。しかし、通読せねば要領は得られないとも述べている。この伊佐早の歴史書編纂における姿勢は、大正二年の『編年西村山郡史』や同九年の『山形県史』(全四巻)にも見られ[57]、伊佐早がなぜ編年体で史書を編纂することを重視していたかを裏付けるものであろう。つまり、自分が資料を収集し、その資料を元に歴史書を編むことは研究者が数十年の労なく、その研究を行えるためにしたものである、これが伊佐早の資料収集においてもその根源たるものであったのだと思われる。

さらに伊佐早の思想の断片を窺えるものに、晩年の大正十五年(一九二六)、米沢有為会の東京興譲館で講演した内容がある。それによれば、藩校時代の興譲館は今日のように学問も細密に分かれてもおらず、研究するのも科学書の類ではなかったが、そこで勉学をすることは「枢要なる人間」になり、「米沢藩を興隆しなければならぬと考えた至誠」があったという。

他は経済学の如き科学も知らず、医学等も知らず何も知らない。只一通りの支那経書を読み、歴史を読んで興亡治乱を学んだに過ぎない、然もそれで出た人物は今申した通り民政に当れば民政、経済に当れば経済、全体の政治に当る者は全体の政治を経論することが出来た。[58]

藩校時代は「大学」「中庸」や「春秋左氏伝」等の中国の経書や歴史を読み、その興亡治乱を学ぶことで、専門的に民政や経済を学ばずとも全体の政治に当たることができた。しかし現在を思うに、己の学問を追求することにみな注力しているが、

興譲館が創立せられた所以の己を忘れて国家の為にする様な才

を善道に向はせ国家の為に働かせると云う様にしたなら、先君の御旨にかなひ興譲館を創立せられた御趣意に背かないのみならず、当時興譲館生が国家の為に有益な学生になったばかりでなく、今日に於いても国家の為に働く様になるであろう。[59]

己のための学問ではなく、才を国家のために働かせることができたならば、興譲館を創立した上杉鷹山の趣意にも沿い、国家のために働く有益な人物となるであろう、と伊佐早は述べる。伊佐早にとって、「枢要なる人間」になるための学問、それは藩校興譲館を指針とし、本稿でこれまで見てきたようにその学問を支えるための書籍や資料、そしてそれを保管するための図書館、伊佐早の思想はこのように繋がっていたのではなかろうか。

---

① 新宮学「近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙の仕事」(『西村山地域史の研究』、第三十六号、二〇一八年)

② 山形県立図書館編『故伊佐早謙先生閲歴』、一九三〇年。伊佐早が生まれた日を西暦になおすと、一八五八年二月二十一日となる。片山は慶応三年(一八六七)三月八日に興譲館提学となる(「御家中諸士略系譜」)。

③ 前掲註②、一二〜一三頁。

④ 財団法人米沢図書館「図書館財団設立趣意書」(市立米沢図書館　内部資料)

⑤ 『西洋事情　初編　巻之一』(『福沢諭吉全集』第一巻、岩波書店、一九五八年)、三〇五頁。

西洋諸国の都府には文庫あり。「ビブリオテーキ」と云ふ。日用の書籍・図画等より古書珍書に至るまで万国の書皆備り、衆人来りて随意に之を読むべし。

⑥ 日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み—日本図書館協会創立百年記念—』、一九九二年、一一四頁。

⑦ 日本図書館協会編『近代日本図書館の歩み　本篇』、一九九三年、二一三頁。また、「米沢新聞」明治四十二年十月九日の記事には、財団法人米沢図書館の設立発起の理由について「日露戦役に際し各地紀念事業」の一環であったことが初代館長松山亮より述べられたことが記されている。これは財団法人米沢図書館に限ったことではなく、戦勝紀念として各地で図書館の開館が相次いだことも事実である。

⑧ 境沢和男「米沢地方における西洋思想受容過程の一断面—清水彦介の生涯と思想」(『近代学校成立過程の研究—明治前期東北地方に関する実証的研究』、御茶の水書房、一九八六年。

⑨ 清水彦介「米沢文庫設立案」(『天雷子　続三』、市立米沢図書館　清水彦介資料三)。清水彦介に関しては、拙稿「清水彦介の近代—近代図書館の曙光—」(『米沢国語国文』第五十号、山形県立米沢女子短期大学国語国文学会、二〇二一年)を参照されたい。

⑩ 前掲註④「趣意書」

⑪ 『図書館日誌』明治四十二年十月十七日(市立米沢図書館　内部資料)。

⑫ 前掲註①、新宮論文。

⑬ 市立米沢図書館編『米沢図書館一〇〇年』、二〇〇九年、四頁。また令和三年二月二十七日より三月十四日まで、よねざわ市民ギャラリーで「林泉文庫の世界展—伊佐早謙がつないだ沖縄と米沢」(山形大学附属博物館・市立米沢図書館共催)を行い、その際に展示図録『林泉文庫の世界展—伊佐早謙がつないだ沖縄と米沢』、二〇二一年を作成した。

⑭ 扁額「林泉文庫」、個人蔵。

⑮「北燕游草」は現在、山形大学小白川図書館所蔵である。(前掲註⑬図録、十頁)。

⑯「御詩和韻集」は現在、市立米沢図書館所蔵、林泉文庫三三〇にコレクション化されている。

⑰ 前掲註⑬、四頁。

⑱ 前掲註⑬「林泉文庫の最前線」、十七頁参照。また、山形公立大学法人附属図書館所蔵の「林泉文庫」は、科研費報告書『「上杉家御譲本」の所在調査とその史的研究』、研究代表者：東海林静男、一九八九年によるものである。

⑲「米沢新聞」昭和十三年一月二十日

⑳ 赤井運次郎校註、古山英子編「市立米沢図書館所蔵　郷土資料の由緒」、一九六九年、二十頁。

㉑ 市立米沢図書館編『米沢図書館100年』、二〇〇九年、六頁。

㉒ 伊佐早謙筆『米沢市史稿』(市立米沢図書館　開架資料K212／I)

㉓「珍書文庫設立案」(市立米沢図書館　内部資料)

㉔ 前掲註㉓「珍書文庫設立案」

㉕ 前掲註②、四頁。

㉖ 前掲註㉑、六頁。また、『故伊佐早謙先生閲歴』によれば大正十五年に行われた日本図書館協会主催の第十一回全国大会を山形県で開催するにあたり、県立山形図書館、酒田、鶴岡とともに企画し、図書館事業の面目を掲げたと記されている(前掲註②、九頁)。

㉗ 明治四十四年七月　伊佐早謙撰　土肥博書「創立米沢図書館碑」

於是新設興譲館財団、以保管図書財産、亦将有以資人文発達之途也、

現在もこの図書館碑は、初代米沢図書館が建設された法泉寺境内に現存している。

㉘ 前掲註㉗「創立米沢図書館碑」

文庫堅牢、楼室宏潔、不奢不陋、閲覧之便全備、而宝書珍籍之富、則不敢出足利文庫之下、豈不盛哉、盖人文之発達固不能不依図籍凡有求乎、此館者不宜不夙夜研究修徳磨智、以資国運之発達、是本館之所以設立也、藩学旧有孔子廟、亦為財団所管祭祀不怠、今茲辛亥徒廟于館之東北置、祭資金五百円以祭焉、並記以諗来茲云、

㉙ 青木昭博「解説　市立米沢図書館の蔵書と現在の興譲館本」(書誌書目シリーズ九〇『米沢藩興譲館書目集成』第四巻、林泉文庫書目解題・解説、ゆまに書房、二〇〇九年)、五六七～五六八頁。

㉚ 前掲註㉙青木論文、五六八頁。

㉛『米沢市史』第二巻、近世編1、米沢市史編さん委員会、一九九一年、六一八～六一九頁。

㉜『米沢市史』第三巻、近世編2、米沢市史編さん委員会、一九九三年、六九六頁。

㉝ 松野良寅「学館興譲館の変遷」(『米沢市史資料　第八号　幕末から明治初期にかけての教育事情』、米沢市史編さん委員会、一九八二年)。

㉞ 厳密にいえば、伊佐早が米沢中学校に勤務していたのは明治十七年から明治二十三年、明治二十六年から明治三十年までである(前掲註⑬、二十頁)。

㉟『米沢市史』第四巻、近代編、米沢市史編さん委員会、一九九五年、四九頁。

㊱ 前掲注㉟、二三九～二四〇頁。

㊲ 前掲注㉟、二四〇頁、六〇三頁。

㊳ 前掲註②、九頁。米沢藩及び米沢図書館では、釈奠を釈典と記していた(前掲註㉑、五頁)。

㊴ 藤敏夫『近世日本釈奠の研究』、思文閣出版、二〇〇一年、一九二頁。

㊵ 前掲注㉘参照。

㊶ 前掲註㉑、五頁。
㊷ 前掲註⑨「米沢文庫設立案」
㊸ 前掲註⑨「米沢文庫設立案」
㊹ この大町に設立されていた「米沢文庫」の詳細は不明であるが、「興譲館本」中に同町の渡部伊右衛門の蔵書が多く収蔵されており、それとの関係が考えられる。
㊺ 財団法人米沢図書館『珍書目録』、一九一一年。国立国会図書館の所蔵本には、「明治四十四年五月十五日」の寄贈印とともに初代米沢図書館長の松山亮から寄贈された印が捺されている。
㊻ 前掲註㉙青木論文、五七五頁。
㊼ 前掲註㉑、九頁。『図書館日誌』昭和二十年七月（市立米沢図書館内部資料）。
㊽ 前掲註①新宮論文。山形大学小白川図書館に所蔵された『大清道光二十七年歳次丁未時憲書』に注記された「先考」との文言から、これは亡父である伊佐早謙を指すと推定し、この『書目』は伊佐早の息子の信によるものであると考察された。また、この『書目』は現在、複本三冊の所在が確認されているが、上杉家本宅及び伊佐早家にもこの目録が所蔵されている可能性は高い。
㊾ 榮野川敦・勝連晶子「戦前に流出した琉球・沖縄関係資料について」（うるま市立図書館市史編さん係編『蔡大鼎『伊計村遊草』等調査研究事業成果報告書』、うるま市教育委員会、二〇一五年）、一〇九頁。
㊿ 『市立米沢図書館架蔵　上杉文書目録』、雄松堂、一九六九年。前掲註⑬、「林泉文庫研究の最前線」、十八頁。
(51) 前掲註㉙書、一二七頁。
(52) 内田智雄「ハーバード・燕京・同志社　東方文化講座シリーズの終刊に際して」（『東洋学研究』、十九―一、一九六〇年）。
(53) 現在、市立米沢図書館所蔵の「林泉文庫」七〇六部一六三四冊のうち、欠番が二部、不明資料が六部六点ある。
(54) 前掲註②、十一頁。
(55) 伊佐早謙著『奥羽編年資料』凡例（市立米沢図書館　地域史料ＫＥ００７）
(56) 前掲註(55)『奥羽編年資料』
(57) 大正二年に依頼された『米沢市史』は、印刷される前に、大正六年五月の米沢大火が起こり、伊佐早による『米沢市史』は刊行されなかった。現在、市立米沢図書館に残る伊佐早謙直筆の『米澤市史稿』は六冊あり、一冊目は「上長井村目録」、二冊目「下長井東通村目録」、三冊目「小国外中津川村目録」、四冊目「中郡村目録」、五冊目「社寺」、六冊目「米沢史巻之十四下」と残っている。一から四冊目までは村目録資料の写本、五冊目は社寺縁起、六冊目は藩士の系譜となっている。そこから推定するに、おそらくこの『米沢市史』も編年体、もしくは資料集のような形態で発行しようとしていたのではなかろうか。
昭和十九年に発行された『米沢市史』の序には、

本市大正の初頭に於て、伊佐早謙氏に委嘱して、米沢市史を編成せんとせしが、大火に遭ひて其の既成の稿本を失ひ、次いで同氏の逝去によりて全く中絶するに至れり。茲に昭和九年十一月、更めて市史撰修の計画を樹て、上杉神社宮司大乗寺良一氏を委員長に挙げ、椿辰之助、今井清見、中澤千代松、橘薫の四氏を委員に嘱託して新に編纂に従事せしむ。

と、大火によってその既成の稿本のほぼ全てを失い、また伊佐早の死去によって中断していた『米沢市史』の刊行は昭和九年になり、改めて計画が立てられたことが述べられている。
(58) 伊佐早謙「米沢藩興譲館の沿革　大正十五年十二月於東京興譲館講演」（『米沢有為会雑誌』、第三五九号、米沢有為会、一九二七年一月発行）
(59) 前掲註(58)、伊佐早講演。